

# ともに 石巻だより

子どもたち  
あの日、帰らぬ旅に出た  
子どもたちの記憶を刻みます

## 今野麻里さん「18歳」 理加さん「16歳」 大輔くん「12歳」 地域、家庭に育まれて

間垣地区は北上川右岸にあった旧大川村の中央付近、住所名でいうと石巻市針岡になる。1950年代に書かれた「大川村誌」によると、大正、昭和の河川改修の後、大川中学校が新設されてから集落として発展を見せたという。

石巻・渡波地区出身のひとみさんは針岡に嫁いだ姉のもとをよく訪ねていた。親戚の紹介で今野浩行さんと知り合い、91年に結婚。翌年、麻里さんが生まれた。

二人が結婚したころ、浩行さんの父、浩さんは間垣の自宅のすぐ隣で、「大川電子」という電気部品の製造工場を経営していた。大手の電機メーカーに製品を納入し、多いときは大川地区の女性たち100人ほどが働き、近所では200軒ほどの家庭が内職を行うという、地域の要だった。

初孫の誕生に、祖父の浩さんは喜んだ。盛大に「孫振る舞い」を催し、地域の人が

ひとみさんは誇らしかった。

高校では希望していた演劇部へ。学校近くに住む級友の家に遊びに行くと、友の母親の車いすを押すのを手伝った。

「やさしい子でした」。ずっと後になって、ひとみさんはその話を聞かされた。保育士を目指し、短大への進学も決まっていた。

あまり目立とうとしなかった理加さんは、どこかで姉へのあこがれがあったのかも知れない。中学3年の時の文化祭で副実行委員長を務め、みんなの前であいさつを述べた時、両親には少しずつ変わろうとしているように思えた。高校の吹奏楽部でサクソスを演奏。楽器を持ち帰り、懸命に練習する姿はいつも記憶に残る。演奏会への出演を仕事で見に行けなかったのが、ひとみさんには悔やまれる。

料理が好きだった。高校に入ると、帰宅した浩行さんのため、仕事で遅いひとみさんに代わって夜食をつくる。オムレツが得意だった。

どこで習ったのか、炊飯器でチーズケーキを作ったことも。ボーイフレンドの家が飲食店をしていたこともあって、いつしか「管理栄養士になりたい」と言うようになる。福島県の学校への進学を、浩行さんに相談していたという。

大輔くんは小学3年からスポーツ少年団で柔道を始めた。大川中学校



が、大輔くんの帰りを待っていたの

伝えたい。過ぎ去った日々のあの笑顔。暗闇に立ちすくんだ時、この記録が足元を照らす光となるように。そしてまた明日の朝を迎えられるように。朝日新聞社員がつづる。

ちにご馳走した。仕事の合間、工場の人みんなに抱いてもらったことが、当時働いていた人たちの間で語り継がれている。「バブル」の名残の時代、工場も順調だった。

麻里さん誕生の翌々年、理加さんが生まれた。その4年後、大輔くんが生まれた。男の子の誕生は浩さんをさらに喜ばせ、初孫のときに行う「孫振る舞い」を再び開いたほどだった。

やがて景気が翳りがさし、工場経営は厳しくなる。大輔くんが小学校に入るところ、一家は工場の閉鎖を決め、浩行さんは東松島市の会社に勤めるようになる。

祖父の浩さんには期待があったようだ。いつか大輔くんが工場を再開してくれたら。新しい工場用地にと、近所に購入していた土地を、閉鎖した後も手放さずにいた。

### それぞれの成長

3人の子どもたちは不自由なく育っていた。春の運動会では、毎年、地区対抗のリレーの選手に選ばれ、6年生の時は1位に。その年、赤組の応援団長も務め、応援歌を歌い、「白」の牛乳を飲み干すパフォーマンスを披露。トロフィーをもらう写真がアルバムに残る。さまざまな行事を通じて、子どもたちは地域に育てられていた。

忘れられないのは、5年生の学習発表会で「はだしのゲン」の弟役を演じたことだ。のちに浩行さんは広島市を訪ね、原爆ドームを見たとき、大輔くんの姿を思い出して涙が止まらなくなった。

東日本大震災が起きた時、浩行さんは東松島市、ひとみさんは雄勝町のそれぞれの職場にいた。麻里さんと理加さん、祖父の浩さん、祖母のかつ子さんは自宅に。集落の真ん中あたりにあった自宅は、すぐ目の前の堤防が決壊し、何もかも流された。逃げる準備はしていたようだが、大輔くんの帰りを待っていたの

た。幼いころから、工場に連れられていき、大勢の人と接していたせいだろうか、麻里さんは人前でも動じない、はきはきとものを言う性格に育っていた。お遊戯会など、どこでも目立つ子どもだ。

一学年下の理加さんはやや内気で、お姉ちゃんの後にかくれている感じだが、負けず嫌い。姉二人はピアノを習い、仲良く二人で連弾していた。末っ子の理加くんが大きくなると、二番目の理加さんとはけんかが絶えなくなる。几帳面な理加さんの部屋を大輔くんが散らかすと理加さんは怒り出し、なだめ役は長女の麻里さんだった。

それぞれに性格が違い、けんかもするけれど、浩行さんとひとみさんには、3人が大の仲よしに思えた。

麻里さんは、学校の劇などでいつも主役級を演じ、中学3年のときの文化祭では「ライオンキング」のテーマソングを英語で歌い上げ、「ジューピター」をバイオリンで演奏した。ピアノは習っていたが、家でバイオリンを弾いたことはない。いつ練習したのか。「何にでも挑戦したい子なんだな」。

間垣の家並みは消え、今は住む人はいない。大輔くんは数百メートル離れた大川小学校で級友とともに犠牲になった。

### 地域のつながり

幼い3人が晴れ着姿で並ぶ写真がある。津波に襲われたひとみさんの実家でなんとが残っていた。父母の宝物だ。

今となれば、後悔は数知れない。いろいろな行事での姿を仕事で見られなかったのもそのひとつだが、子どもが最も成長する時期、親も忙しい。

葬儀の際、幼い子どもが母に連れられ、遺影に小さな手を合わせていた。麻里さんからよく遊んでもらっていたのだという。両親も気づかないところで、子どもたちは大人になっていた。

震災後、ひとみさんは車の中で「10円足りない」と記された大輔くん手書きの「借用书」を見つけた。学校近くの雑貨店で少年ジャンプを買うときに、お金が足りず、一筆書いて後で払ったらしい。町の人々の温かいつながりに子どもたちが育てられていたことを改めて感じる。

思い出されるのは震災の少し前のこと、理加さんがこんなことを口にした。「ねえ、こんなに幸せでいいのかなあ」。そして、こう続けた。「死にたくない……」

どんな意味を込めようとしたのかは分からない。でも、地域と家庭に育まれた幸せな日々の中に子どもたちがいたことは確かだ。二人はそう思う。

### 明日の風

酷暑を迎え、4年前の夏を思う。女川湾の北岸へ注ぎ込む沢の周辺はうっそうとして、蚊が群がってくる。草むらで足をとられて転ぶのも構わず歩き続ける母親は、ひとり息子を捜していた▼あの日、ほぼ10人に1人が犠牲になった女川町。その数字は、町を歩くうちに像を結ぶ。学校を訪ねると、教壇の先生は娘を亡くしており、教室には父や母、弟妹の帰りを待つ生徒がいた。役場には家族を捜し続ける職員がいた。仮設の商店街でも▼女川原子力発電所の経済効果を知るため、老齢の元商店主を訪ねて、原発の話を2時間余り教わった。いとまを告げた時、彼は大きな箱を取り出した。「ばあさんが泣いて泣いて飾れないので、見てもらえませんか。黒髪の美しい女性がほほ笑む。ひとり娘の遺影だった▼喪失感が満ちた町で、もうひとつの数字が像を結ぶ。県民の4人に1人が命を落としたという70年前の沖繩。広大な更地と化した三陸の浜辺に立ち、今なお米軍基地、

の轟音に耐えねばならない南国の喪失感の奥底を思う▼1945年4月1日に米軍は沖繩本島へ上陸。戦闘は住民を巻き込み、日本軍の牛島満司令官らが自決する6月23日まで続いた。当時の新聞は「沖繩に輝く牛島部隊の偉功」(6月25日付朝日新聞1面)など政府の発表文しか伝えられず、失われた命を数えることも出来なかった▼7月に連合国側はドイツ首都郊外ポツダムでまとめた宣言を発表した。日本の新聞では、政府の統制下、「国民の戦意を低下させるおそれのある二カ所が削除された」(朝日新聞社史)。それは、武装解除後の軍隊は家庭に復帰して平和的生活を営む機会が与えられるといった部分と、日本人を民族として奴隷化し国民として滅亡させようとするものではないという部分だった▼8月6日に広島、9日に長崎へ原爆投下。その後には日本はポツダム宣言を受諾し、戦争は終わる。伝えていたなら、知っていたなら、救えた命があったかもしれない。夏の空に誓う。伝えるべきを伝えよう。

# 雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの雄勝病院の話から始めよう。

【第9回】

## 「ちよつと寒いね」栄養士は笑顔で

西北西の風が強まる中、津波は勢いをゆるめず、町の中心街へ押し寄せた。

2011年3月11日の午後3時20分すぎだ。

波は、3階建ての病院を越え、屋上の職員と患者を押し流した。当時22歳だった女性栄養士、Bさんの証言を記す。

本館屋上に達した最初の波は、胸元にとどまったが、次の波は一気に人々をのみこんだ。

次々に押し寄せる材木や梁につかまる。ザブンザブンと波音がして、そこここに声が交じる。沖を向いて漂うBさんは背後に、自分の名を呼ぶ、なつかしい声を聞いた。肩越しに心えた。

「あ、弘江さん。大丈夫ですかー」  
先輩の主任栄養士、佐々木弘江さん(当時42)が彼女を呼んだのだった。山を向いて何かにつかまる佐々木さんも、肩越しにBさんを見ながら言った。

「うーん。がんばろうねー」  
佐々木さんは、職場で見せる空腹と渴きを感じていた。流れてきたカップ麺を拾い上げ、かじってみた。渴きが増した。漂流物がたまったところへ屋根が傾き、ガガガと音を立てた。(沈んでも仕方ない)。覚悟を固めたが、沈まなかった。夜は長かった。もう明けないのかとささ思えた。

## さびついた釜に思い出はあふれて

空腹と渴きを感じていた。流れてきたカップ麺を拾い上げ、かじってみた。渴きが増した。漂流物がたまったところへ屋根が傾き、ガガガと音を立てた。(沈んでも仕方ない)。覚悟を固めたが、沈まなかった。夜は長かった。もう明けないのかとささ思えた。

「おいー」と声を上げてみた。何も返ってこない。(え。私だけ。なんで)。驚いたが、皆も助かっているだろうと思つた。漂流物が海面を埋め尽くしていた。

上空に何度もヘリコプターを見た。発泡スチロールをふっつが、気づかれない。屋根に乗ったまま、ゆっくり歩く速度で湾

いつもの笑顔を返しながら、もう一言、つづけた。

「ちよつと寒いねー」

とてつもなく寒いのに……。

先輩は、後輩のためにいつもと変わらないユーモアを返す。

雄勝湾から約12キロ南、石巻市の気象観測所が午後4時に

## 「夏なら海水浴だ」薬剤師にも笑み

Bさんが向き直ると、約2メートル離れて同じく沖を向いて漂う主任薬剤師の鈴木一男さん(当時43)も言った。

「がんばれなー」

さらに鈴木さんもつづけた。

「だけど、夏だったら、よかつたね。そうだったら、海水浴だったのにね。気持ちよかつたのにね」

とてもやわらかい口調だった。顔には笑みも浮かべていた。大変な緊張感も伝わってくるが、年下のBさんをなごませようという思いも伝わってきた。

厳寒の海の中。鈴木さんたちと一緒にいた時、Bさんには寒

記録した気温は0・4度だった。2人の距離は20メートルほど。茶色のダウンジャケットを着ていた先輩に、後輩は言った。

「ダウン、ぬいだほうがいいですよー」

佐々木さんは、言葉を返さず、肩越しに笑顔を返した。

それが、後輩が先輩を見た最後だった。

## 「あれにつかまれー」

浮き球がついた養殖のロープが流れてきた。鈴木さんが声を上げた。「あれだったら沈まなからー」

鈴木さんの隣

には薬剤助手の女性(当時37)、そして彼女の隣には、Bさんに屋上への避難を指示してく

れた看護師(当時54)がいた。

互いに3メートル前後離れていた。

薬剤助手は声を発しなかった。慌てた様子でもない。ただ、ぼうぜんとしていたようだった。

看護師はひどく慌てていた。叫ぶのではないが、大きな声で繰り返す。「泳げないから。助けて」と訴えていた。が、そこま

で誰もたどりつけない。

それぞれ、木切れにつかまり、それが沈めば、タイヤにつかまる。それも沈めば丸太に。手の届く距離に次々流れてくる。

鈴木さんが、Bさんたち3人に大声で指示を出し、励ます。

「あれにつかまれー。大丈夫だからー」

浮き球がついた養殖のロープが流れてきた。鈴木さんが声を上げた。「あれだったら沈まなからー」

波が高まつてきた。鈴木さんは流れ

た。

それを見てBさんは安心した。彼女自身はそこまで行けない。鈴木さんは彼女に言った。

「がんばれなー」

「はーい」

Bさんは手をふった。

ロープにつかまりながら、何度も波をかぶる。こらえる。左手がロープにとられた。

どんどん沈んでいく。

(このまま沈んだら終わりだ) 渾身の力で左腕をひきぬいた。痛みはないが、出血している。

(まず生きていらないな) 体は浮いた。周囲は漂流物だらけ。人影は見当たらなかった。

(そろそろ日が暮れるかも) 西の山へ目を向けると、屋根が流れてきた。歩くほどのスピードで近づいてくる。その上

のぼり、体育座りする。体はガタガタ震える。菌も鳴る。止めようもなく、カスターネットのように鳴りつづけた。

午後6時の気温は零下0・2度。翌朝8時まで氷点下の寒さがつづく。

発泡スチロールの箱が入った袋がいくつか流れてきた。頭にかぶり、体の脇に敷き、降る雪をよけた。(寝たらだめなんだ)と自分に言い聞かせた。睡魔に襲われることはなかった。

「聴診器の音が聞こえないー」と鈴木孝壽副院長(当時58)が怒つたように言いに来て、こつ言い足す。「騒いでもいいから、今日はニンジンを入れるな」

10年夏、窓にすだれをつけてもらった。そこへ小鳥が止まる。でも、後輩は鳥が苦手。ある日、弘江さんは外からそつと窓辺に近づくと「わーっ」。突然の大声に小鳥も後輩もびっくり。

笑顔で戻ってきた弘江さん。「これでもう来ないから」

「弘江さん、診察室に患者さんいますよ」

「あ、そうだ、そうだ」  
楽しかった夏の日。思い出があふれる。初めて泣いた。

## 高線量いつの時点で「のちに分かったのです」

女川町議会は2014年7月、福島県の福島第一原発事故の被災地を視察した。初日に訪ねたのは浪江町。今も全町避難中だ。原発は隣の大熊町と双葉町に立つ。震災直後の約3日間、町はテレビ情報を元に役場から約30キロ西の地区へ避難していた。

女川町議の阿部律子氏(59)が尋ねた。「いつの時点でその地区が大変な所だとわかったのですか」。浪江町議たちは次々と言葉を返してきた。「政府からも東京電力からも連絡は来ない。1万人以上の町民が集まって。少ない米を集めて炊き出しやって、子どもたちがおにぎりを食べている外でね。のちに分かったのです。毎時300前後のマイクロシーベルトだった」。放射線量のあまりの高さに「おお」と女川町議らはうめいた。

阿部氏は振り返る。「原発があろうとなかろうと、事故が起きれば被害の差はないが、情報の差はあまりに大きい」

共産党の町議だ。震災前は、女川原発の廃炉を唱えるより、事故のないよう監視することに徹していた。事故は防げるという「安全神話」が自分にもあったかもしれない、と今は思う。

震災時、女川原発を襲ったのは「震度6弱」の揺れ。「6強」でも「7」でもなかった。だが火災が起き、損傷した。「原発はどこで動かしても危険だと言わざるをえない」とつくづく思った。

震災時に約1万人だった女川町の人口は今、7千人を切った。原発なしに町は成り立たないという声に、こう反論する。

「原発があるのは、宮城県では女川町と石巻市だけ。全国でも原発のない町はいっぱいあるでしょ。みんな、それぞれの身の丈に合った財政運営をやっているでしょ。原発のお金がなければやっていけないという考え自体、変えなければ」

人々は、自分自身が被害に遭わなければ福島のことを自分のことに出来ないのかな……と嘆息する。

女川原発の再稼働に反対する。震災後に女川町内で反対の署名を募って歩いた。「県に出すなら書ける。町に提出するのなら書けない」と断る人もいた。無記名の住民投票を実現し、町の人々の真意をくみとりたいと願う。